

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

マタ(冬)



シリマタ(冬到来)ー寒いですね。現代でさえこんな寒いんだから、かつてのアイヌの人たちにとつて、冬はどんなに厳しい季節だったことでしょう。暗く長い冬にじっと耐え、ひたすら明るい春を待ち焦がれる…。これが定番のイメージだけど、案外そればかりでもなかったみたい。

なんとつて冬は狩猟の季節!かんじきを履いて奥山に分け入り、冬眠中のキムンカムイ(クマ神)を獲る。クマ神の本体である魂は丁重な儀礼とともに神々の世界に送り返し、その毛皮や肉、そして貴重な漢方薬でもある胆嚢(なまのう)などは、クマ神から人間へのプレゼントと考え、みんなに振舞って盛大にお祝いする。熱気にあふれたコタン(村)の光景が

目に浮かびます。

とはいえ夏にくらべれば、どうしても家中で過ごす時間が長くなるよね。だからといって、ただゴロゴロ寝てたわけじゃありません。男たちはここぞとばかりに木彫りの腕を振るつたみたい。江戸時代、本州からやってきた人たちが、アイヌの木彫工芸品の素晴らしさに感嘆し、土産物として持ち帰った例が数多くあるの。「商品」として生産していたということは、当時のアイヌ社会の開かれた姿を理解するうえでとても重要。

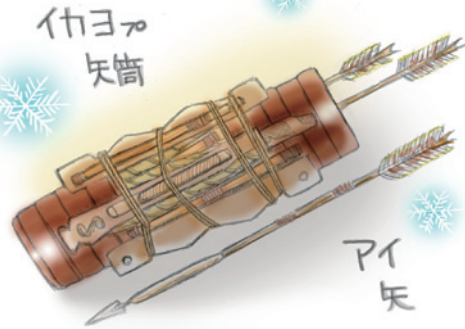
でも私が心惹かれるのは、自分たちが使うマキリ(小刀)やイタ(盆)などの生活用具にも、見事な彫刻を施していることなの。自分自身の暮らしを美しい工芸品で飾る——なんて心豊かで贅沢なこと。冬はそのための大切な季節だったんでしょうね。

美幸さんにとつての冬のアイヌ文化は?



うーん、冬で思うのは私もやっぱり山猟かな。そのせいか冬は男の季節というイメージが強んだよね。

顔をすっぽりと包むコンチ(頭巾)を被り、毛皮を身に付け、足元にはユッケレ



(鹿皮靴)にかんじきを履き、手にはアイオブ(山杖/手槍)を携え、背には野営のための装具をケトウシ(背負い袋)に詰め、犬を従え冬山に向く…。かつての伝統的な山猟の姿ですよね。弓矢の手入れ、矢毒の調合は入念におこなわれたといえます。イカヨブやプシと呼ばれる矢筒の表面には皮剥ぎのための小刀を付けたたり、クマなどの獲物を射止めるたびに、その矢の鏃を記念に飾って獲った証としたんだつて。イカヨブを見るだけで猟の腕前がわかるっていうのもすごいよね。

厳しい冬をのりきるのに動物たちは脂肪を蓄えるので、肉も脂がのつていて美味しく、寒いので保存が利くよね。それに、何といっても動物の冬毛はあつたかさも色艶も夏毛とは比べものにならないほどピリカ(良い)。森の木々も葉をすっかり落とすから遠くまで見通しが利いて獲物を見つけやすいし、雪の上の足跡は動物のいる方向を教えてくれるし、猟のための好条件がそろつてるよね。

雪の季節、ウパシキキリ(雪虫)が多い年は雪が多いんだとか?この秋はウパシキキリがたくさん飛んでいたの
で、大雪になるかもね!